

編集部にQワバラ乱入

からすに物申す!

ザ・ナインセンチメートル

tNcm vs 豆電球

謎の女T・・・(下)



Qワバラ(左)と特派員G(中)と××××(右)

かつてカラズの生徒として当紙に投稿歴もあるQワバラが突如として編集部に乱入! ネオ・アナーキストなバンド、ザ・ナインセンチメートルを率いて、当社専属バンド、豆電球に挑戦状を叩きつけた!
無論我々は受けて立つ。



第5巻第7号
通巻第55号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

ドクター・ペッパーが日本に上陸したのはいつのことだったろうか。かろうじて小学生だったような記憶があるので、恐らく七〇年代の前半だったのではなかったか。日本では定着していないけれど、実を言えば、なかなか私の好みの味である。もっとも、初めて飲んだときの印象はかなり特殊なものだった。清涼飲料のイメージに著しい違和感を持ち込んだことは確かだろう。薬くさいという表現をする友人が多かったのは、ドクターという名称に押された部分もあるものの、外れてはいなかった。
一味違う飲み物といえば、ペルノーもその代表だと言っている。酒好きの間でも、好きが嫌いか、きつぱりと好みが分かれることが多い。映画のカフェのシーンでたまに見かけられるように、アペリティフとして昼日中から一杯ひっかけている人だって少なくはない。フランスではそれほどにポピュラーな飲み物なのである。しかしながら、日本では酒屋でも飲み屋でも、扱っているところはなかなかみつからない。いやいやそれどころか、そんなものは見られない。うちの近所だけを見回したって、ペルノーを置いていた高円寺のご機嫌な飲み屋も、新高円寺の気の利いたイタリアンも店を閉めてしまった。まさかペルノーの呪いなどというものはないのだからうけけれど。

私があ味の味にはまったのは、高校生の頃だったと思うが、当時のものは現在とは成分がかなり異なっていたように記憶する。かのアプサンの代替物として発売が開始されたという曰く付きで、かつては麻薬物質が含まれていた、という記述を目にしたことが何度もある。もちろん、それは相当に昔の話であって、私が物心がつくような時代ではそんなことはありえないだろう。にもかかわらず、当時のペルノーは杯を重ねていくと、舌が麻痺してきたものであった。折に触れ何度も話している話だけれど、なかなか信じてもらえない。そもそもペルノーだけを何杯も飲み重ねる人が少ないので、当時でも同じ体験をした人はほとんどいないのかもしれない。アニゼットは数あるけれど、ペルノーから離れられなくなるのは、何か成分に謎があるのではないかと思ったり、思わなかったり。
ドクター・ペッパーやペルノーに限らず、出合ったときには些か異質な感じを与える存在は少なくはない。例えば戸川純、例えば三度と増九度の和音、例えばカストロールの燃える匂い、例えばスタインパーガーの弁当箱、例えば水色地に黄色いラインのネッツァー・スパー、例えば貝殻デザインのオレンジ色のノー

(最終面に続く)

今日の紙面から

- 二面 オラ面
松本と話をうひんボンパン
- 三面 からすライブラリ
カルチャー 光の時代
本 『ペイネ愛の本』
映画 『スナッパ』
- 四面 (holla)
ポルトガルへ
- 五面 語学画
must have to



からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そう ピンポンパン

みなさんはモーニング娘。があんなに売れていることをどう思いますか。今更ながらですが。

おそらくこのからす新聞に関係ある人は「特に、何も。」と思うだろう。まあ、そういう自分も、たまに「あの加護亜依はいっちょやってるな。」とたまにテレビで見かけては思う、そんな程度である。当然、CDを聞くこともなければグッズを購入することもしない。

しかし、ふと思いついたのは数ヶ月前に所得税の高額納税者リストの芸能人部門にグループのメンバーの名前があった。そのなかには加護もいて、当然一千万円以上納税していたわけである。「こんな中学生のくせに、生意気な。」とその時は思った。と同時に違和感もあった。そして今、「小中学生の商品化」の表の象徴として彼女はそこにいたのだな、冷静に捉えている。

メディアは今回の渋谷の小中学生監禁事件を契機に一齐に小中学生の援助交際を問題視し始めた。もちろん、正義感を振りかざして。しかし、少女であることを性的商品として日本中に認知させたのは他でもない、彼らなのである。化粧をさせ、派手な衣装を着させ、踊らせて、ギャラという多額なお小使いをあげてね。そしたらどうなった？何も知らないが好奇心は旺盛な少女たちはたちまちそれと自らを同一化させ、化粧を求め、派手な衣装を求め、踊りを求め、そしてギャラを求めて渋谷という華々しい舞台へと繰り出した。そしてその結果として表に現れたのが今回の事件なのである。

もう止まらないところまで来ている。金

のためならメディアを含む日本企業は何だって売ろうになつてきている。誰にだって売ろうになつてきている。とはいえ、不景気だから、簡単に売れる商品を開発できないから、といって理性が出来上がっていない子供を売っていいのだろうか？そうするとそれを見ている側の一方の子供達も、自分達も売りたい、って、あるいは売っていいんだ、って刷り込まれるに決まってるじゃないか。こんなことをやっておいて大人の側がどうして子供に援助交際はいけませんなんて言えようか？

なにか全てが止まらないまま急速にどこかに向かおうとしている。無秩序に、無制限に、無防備に。動いているのは自分達であるのに自分達が自分達に追い付かないくらいの勢いで。メディアというモーターのせいにして仕方がない。さらに、そういう装置を気付かぬまま欲しがっている我々のなかの深いところにある何かのせいにして落ち着かない。そう、鬱病のようにネガティブに興奮している何らかのエネルギーの固まり。向かう先には大きな滝つぼがあるような気がしてならない。なんか、多分、戦前の日本が大平洋戦争に突入し始めるころはこんな感じではなかったのかな、とさえ思えてくる。

どうしたらいいんだろう。個は空気を吸うが、空気を作り出してもいる。ともかくは自分のろ過装置を磨くしかないだろう。植物のように、CO2を吸ってO2を吐き出すほどのことはできなくても、自分で知ってる限りきれいでないから。

てなことでももちろん、また明日も海風の中、浜辺を5キロ走ることになる。



スナッパー (the Snapper)

監督：スティーヴン・フリアーズ

原作・脚本：ロディ・ドイル

出演：ティナ・ケラハー、コルム・ミーニイ、ルース・マッケイブ

1994年公開(イギリス) VIDEO：アスミック



ヒューマン・ドラマなどと銘打つてみると、それだけで見る気がしなくなる。そんな私である。幸いなことに、この作品はそういう看板をしょっていなかった。そのおかげで出会えたわけなのだが、さて見終わつた今、端的に形容しようとする、思わず「ヒューマン・ドラマ」という言葉を使いたくなってしまつ自分がある。ばかげた話だ。

べたべたしているような、あつからかんとしているような、執れにしろ、日本ではありえない人間関係、家族、社会がここにはある。笑えるんだが、笑つてばかりではいられないような、イギリス人ノアイランド人つてば、またこんな映画を作りやがって。ああ、でも、とにかく、最後にはほつとできた。(のかな?)

ちなみに、原作・脚本はロディ・ドイル。これはバリー・タウン三部作の第二部にあたる(第一部は『ザ・コミットメント』)。考えてみれば、まだ原作を読んでいない。いけませんな。

(全太)



ペイネ・愛の本

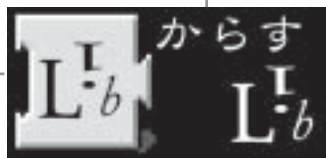
レ・モン・ペイネ 串田孫一(訳)

みすず書房 ISBN:4622011093 1995年 Books



最近、愛を歌つた詩や恋愛映画は、いわはわかりやすい、そして胡散臭いものが多い。ほんとうに溢れている。勿論、俗的な鑑賞はそれで良いのだが、それだけではどうにも脳みそが腐ってしまうのだ。やはり、人の感情とは複雑で、一言に愛といっても、その形は様々なはずなのである。そしてそれは、決して分かりやすいものではなくて、何だか訳の分からないものが愛だつたりするのだ。

レイモン・ペイネのこの本は、すべて絵で構成されている。捲つてもめくつても、あらわれる様々な愛の形。絵の中のふたりがどんな話をしているのか、考えるのも楽しいと思う。(と)



Culture

光の時代

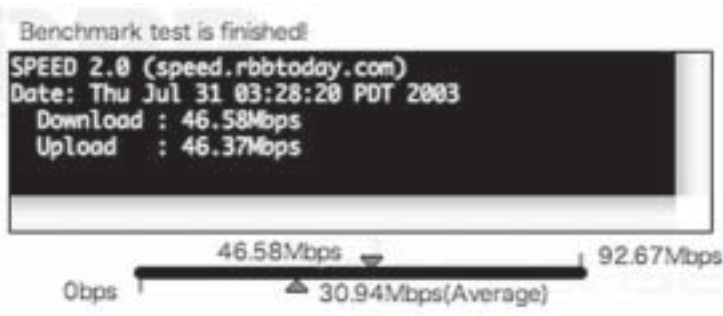
ひかりの時代といえ、幼少の頃東海道新幹線が開通した時によく言われた気がする。数年前パソコン間の通信が10メガビットだった。ところが、先日家の近くに光ファイバーが敷設され、公称100メガのサービスが受けられる事になった。

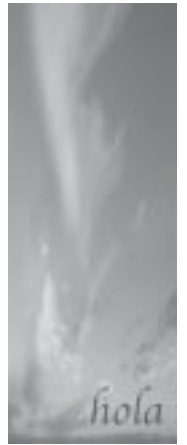
早さの詳細を説明しても無意味だと思つて割愛するが、インターネット創世記の頃からすると、三輪車からフェラーリに乗り換えたぐらいのスピードアップとなった。早いと何が良いかと言われると少々答えに困るが、単に良いモノも悪いモノも早く見られる。早く見られると沢山みられる事になる。沢山見られると何か良いかと言つと、うん、。

サービスを提供しているのは有線ブロードバンドといい、音楽配信していた有線放送がそれまでの資産を活かして光ファイバーケーブルを敷設しなおし、インターネット接続サービスを開始した。実速度は大体40メガバイト前後だが三輪車からすれば天地ほど快適な環境なのは間違いない。

携帯電話を使ったインターネットが主流になりつつある昨今だが、コンピュータで出来る事もまだまだ進化するはずだ。

(小張寅僧)





スペインの西、イベリア半島のもうひとつの国ポルトガルへ行った。

マドリッドからの飛行機は小さなもので、滑走路につづく地面を歩き、こじんまりとした駐機場から乗り込む様子は、どうし見ても長距離バスのようだった。操縦席はとて小さく、計器がぎっしりで窓の高さはわずか三十センチばかりしかない。六十人も乗ればいっぱい、キャビンもコンパクトな隙間のない設計と感心したが、それでもシートは革張りですりやすかつた。

緑に溢れているとか、日本に近い感じがするとかいう話を聞いていたので、このヨーロッパ

の西端の小さな国に、何となくあこがれのような期待をしていた。代表チームの美しいユニフォームやルイ・コスタの華麗なバスに、勝負とは違う次元の価値観があるように感じていたからでもある。

やがて、眼下に続いてきた赤茶けた黄色い大地が、いつの間にか緑にかわる。国旗の色は、土地の色だったのかと納得する。その色が、鮮やかな晴れ晴れしい彩度をもたず、どこか憂いを感じる色調なのは、この半島におけるアラブやジプシーの文化の影響なのだろうか。ポルトの街の上空を低空で旋回しながら着陸してゆく。はじめてやって来た街の上空からの風景にはいつも釘付けになる。ポルトは、有名なドーロワインの産地を上流域にもつ、ドーロ川のほとりに発達した。川が急峻な谷を切り開いて流れるので、河口近くにも関わらず、四、五十メートルもの高さがあるだろうが、峡谷の斜面に街がひろがり、兩岸を結ぶ何本もの橋が架

かっている。エッフェルが設計した、鑄鉄でできた美しいアーチ橋が、ライトアップされ、緑の谷の風景の中に美しくとけ込んでいた。橋は、対岸との間を上下二段で繋いでいる。

河岸には、ワイン蔵がいくつも並び、今では観光資源にもなっていて、いろいろなワインを試飲できるらしい。ワインの樽を上流から運んできたという帆船が何艘も係留され過去と今が重なる。ポルトワインは、いくつもの品種のぶどうを混ぜた赤ワインにブランデーを加え、甘味とアルコール度を高めたワインだが、このドーロ川の上流域が産地である。ワインの瓶は、少し寸胴で上の方が少し広がっている独特の形をしていて、瓶の色も黒っぽい。ひよっとするとポルトワインの色は、ポルトガルのユニホームの色だったのかと思う。

ポルトガルでは、黒い色が印象に残った。豊かな緑でも鮮やかな青い空や紺碧の海でも白い壁でもなく、ワインの深いルビー色でもなく、ときどき視界を過ぎゆく黒い色に、ポルトガルにいるということを強く印象づけられた。

上 ファドの街路でのコンサート 左 ファドを聴く高齢の夫人



黒い瞳に黒い髪の人びとも多い。でも、車からふと見たり、街ですれ違つ婦人の黒い服に、一瞬はつとさせられる。周囲の光が鮮やかなだけに、黒い色が異物のように視界に飛び込んでくる。ポルトガルの女性は、夫を亡くした後、生涯黒い服を着て過ごすという。洗練と力を漲らせた黒ではなく、物悲しい印象の黒は、そんな理由によるのかもしれない。

コインブラ大学の学生の制服とマントも黒だった。コインブラ大学は、ポルトガルで最古の大学で、リスボンやポルトの大学の手本になったという。現在

も、最も優秀な大学で、政財界をはじめ法学、医学など、古くからの伝統に育まれた威厳がそなわる。このような重い歴史は、黒い色のイメージにつながる。

大学で、博士課程の学位を与えるための口頭試問をおこなっている場面に遭遇した。大きな教会堂のような講堂の中央にひとり座らされ、正面十メートルほどの一段も二段も高い場所に、十人ほどの教授たちが座っている。少し離れたところからは、友人や家族もいるのだから、多くの列席者が見守っており、高い天井に静かな声だけが響くという、なんともやり切れないくらい重い空気がその空間を支配していた。図書館は、活版印刷ではあるが、大昔の本を壁面いっぱい収納し梯子をかけて上の段の書物を取る、これこそ図書館という建築空間タイプロジの真正正銘の源流のように思えた。

街の中心部カテドラルの少し下の階段状の街路で、夜、ファドの演奏が行われた。ファドとは、ポルトガルの民衆の歌である。恋を歌い人生を歌う、日本では演歌に近いかもしれない。歌い手と弾き手の四人のチームは、市によって認められたファドのグループのひとつということである。彼らは皆、コインブラ大学の卒業生で、大学在学中から活動していたという。黒いマントを、胸の前で交差させすっぽりと身体を覆って朗々と唄う。聞いている学生も黒い髪を蓄え、黒い学生服に黒いマントである。そのまま聞き流していても邪魔にならない、もちろん聞きほれても聞き応えのある、不思議な音楽だった。左側の弾き手が弾いているのは、コインブラギターで、リスボンギターとともに、ポルトガルの典型的なギターということだ。弦が、二本一組で十二本だったか十本あるらしい。とても奇麗な形と高い美しい音色を奏でていた。金属やプラスチックのように光沢がある黒ではなく、寧ろ、布や水や音楽のように、流れたなびく黒のイメージがあった。

しなきゃいけないのは誰のせい？

- must と have



学校英語にわすれもの
ありませんか？

放火犯：

Now, I **must** set fire to this building.

「さあ、この建物に火をつけなくちゃ」

I **have to** pee before that.

「その前におしっこしとかなきゃ」

三島由紀夫の『金閣寺』は、金閣放火という実話に題材を採った小説だが、主人公の有名なセリフに「金閣を焼かねばならぬ」がある。妄想の果ての思い込みから発せられたこの言葉を、あなたならどう英訳するだろうか。

I **must** set fire to the Golden Pavilion.

I **have to** set fire to the Golden Pavilion.

この2つが浮かぶと思うのだが、訳者アイヴァン・モリスは、must を選択している。たしかに「激しい思い込み」には、have to ではなく、must がふさわしい。一方「おしっこ」のように、自分の意志とは無関係にしなくてはならないことには、have to の方が似合っている。しかし、学校では、「しなければならぬ」= must = have to と教わった。あなたは、中学2年で覚えたきり、これらと同じものと思いついてはいないだろうか。そんなあなたの忘れものは - - -

must : 自分の意志で「やらなきゃ」

have to/have got to 義務として「やらなきゃ」

一般に、must の方が意志が強く、have to はそれよりちょっと弱めだと言われるが、厳密に言えば次のとおり。

言っている本人が望んでいれば must、本人というよりも他の誰かが望んでいたり、法律や規則などで決められていれば have to。それゆえ、自分は望まないことでも、それが必要と感じれば have to を使う。

『金閣寺』では、主人公の放火への明確な意志が描かれており、must とするのが順当だ。仮に主人公が、「自分自身は焼きたいとは思わないが、世界がそれを望んでいるから」というような使命感を持っていると解釈できるならば、have to が選ばれたことだろう。

自由意志の must と、外圧の have to。このことをさらに次の問題で確かめてみよう。

【問題】ミスをしでかした同僚に、あなたは「ボスに謝んなきゃだめだって」と声を掛けたいのだが、それぞれの空欄にふさわしいのは must、have to のどちらか。

You () apologize to the boss.

(でない俺が怒られるんだよ)

You () apologize to the boss.

(それが社会人ってもんだろう)

答： : must : have to

では、「頼むよ、行ってくれよ」という自分の意志が感じられるから must。では、「俺はいいけど、この状況ではそれがお前の義務なんじゃないか」という客観的なニュアンスなので have to がふさわしい。

他の例も挙げておこう。

あなた：

Tomorrow, I **have to** ask her to go out with me.

「明日こそ、彼女をデートに誘わなきゃな」(しかたない)

友人：

You **have to**? That girl has got something on you?

「誘わなきゃいけない？ その女、お前の弱みでも握ってるのか？」

星一徹：

You **must** keep putting on this Major League Ball Training Cast.

「お前はずっとこの大リーグボール養成ギブスをつけていなくてはならんぞ」(わしの命令だ)

飛雄馬：

I **have to** keep putting on this cast.

「俺はずっとこのギブスをつけてなくちゃいけないんだ(父ちゃんの命令だから)」

伝道師：

We **must** believe in God.

「私たちは神を信じなくてはならないのです(まちがいありません)」

- 信者：

Must we donate more?

「もっとお布施が要りますでしょうか」(必要なら喜んで)

- 無神論者：

Do we **have to** believe in anything?

「ぼくたちは何かを信じなくちゃいけないの？」(そういう決まりにでもなってるんですか?)

別れを勧める女：

If you don't love him any more, you **must** say Good-bye to him.

「もう彼のこと愛してないんだったら、彼にさよなら言わなきゃ」(早くそうしなさいよ。彼のことは私にまかせて)

それが言い出せない女：

Yes. I **have to**...

「そうね、そうしなきゃ・・・」(何か気が進まないな、言いにくいよ)

(最終面に続く)

(一面から続く)

ト・パソコン、などなど。それぞれに、初めて触れたときには幾許かの落ち着かなさをあなたに感じさせたのではなかったか。

しかし、人間は慣れる動物なのである。いつの間にか、どんなものもそれほど奇異には感じなくなってしまう。そのおかげで、さらに次の地平に進めるのだ、という側面があるわけだ、このこと自体は、なかなか結構なことのように思ってしまう。パッパがいて、シューマンがいて、ドビュッシーがいて、ベルクがいて、私がいる、などという怒られそうだけれど、少なくとも、これらの先達の存在なくしては、現在の私の美意識はありえないという事は確かである。そして、今の美、今の快楽に私たちはすぐに慣れてしまい、より新しい美、より新しい快楽を創出しようとしていくのである、というような。

けれども、私たちが慣れるのは美や快楽に對してだけではない、ということに注意しな

ければならない。嘘つきは泥棒の始まり、という言葉の通り、人間は悪にもどんどん慣れてしまう。この成語は小学校の卒業と同時に忘れてしまおう程度のもので、軽く見られがちなものだが、実は非常に恐ろしい真理を突いているのである。

数年前に私たちは酒鬼薔薇聖斗という稀代の異常者に出会い、戦慄を覚えたものであった。これ以上はない、という衝撃を受けた、という風を感じた人も少なくなかったはずだ。けれども、匹敵するような事件が起きてしまった。単純に年齢だけで比較することはできないけれど、この出来事を眼前にして、私の無力感は何の際に受け止めたものとかかなり近い。

今回の事件で私が強く感じたのは、これを機に、私たちはまたひとつ異常なことへの耐性を強めてしまおうのだらう、ということである。一歩ずつ異常なことに慣れていってしまう、個人としても、社会としても。そして、また、次の

とんでもない事件へと繋がっていつてしまおうのではないかと。第二の酒鬼薔薇、第三の林真須美や第四の麻原彰晃が出現し、第五、六の……第十、第十一の……という頃には、こんな事件ではいちいち驚いていられないよ、という時代になってしまっているのではないかと。

どんなものにも慣れる、と書いたけれど、実を言うと、私は未だに水色地に黄色いラインのネッツァー・スパーにだけは慣れることができていない。ネッツァーを敬愛してやまない私だが、あのスパイクを履かなければならないのなら、サッカーなど金輪際しなくてもかまわない、というほどに。

あのスパイクに慣れられないのと同じように、人間にとつてもつても慣れることができない悪や異常が存在するはずだ、と期待してはみるもの……

(五面から続く)

また、must と have to のちがいは、否定文にしてみてもわかりやすい。must not = 「～してはいけない」、don't have to = 「～しなくてよい」と、否定文では意味に差が出ることは中学でも教わる。これを機械的に覚えてしまった人が多いと思うのだが、そもそもの意味を考えてほしい。

自分の意志でしなきゃいけない must には、「ぜったいするぞ」の意志が込められる。その逆は「ぜったいしないぞ」、つまり「しちやいけないぞ」ということになる。

You mustn't smoke here.

「ここでタバコを吸っちゃいけませんよ」

一方、周りからの圧力でしなきゃいけない have to の逆は、周りからの圧力がないこと。つまり、「しなくてよい」ということになる。

You don't have to stay off smoking here.

「ここでタバコを我慢する必要はありませんよ」

(望月)



じょじ伊東プロデュース番外講演

家族は踊る

高円寺三ツバカ兄妹弟

高円寺 明石スタジオ

8月28日(木)～31日(日)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta@geta-s.com
篠崎健一アトリエ

(全太)

編集後記
からす新聞第五巻第七号(通巻第五五号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年八月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451

